

え？ サイゼじゃない  
の？

直乃

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

会社をクビにされ目がいつも以上に腐つてしまつた八幡。

そんな彼が立ち寄つたのは変人だらけのファミレス?!

なぜか八幡はそのファミレスで雇われ働く羽目に?!

時系列的には小鳥遊君が入つてすぐあたりです。

この作品は作者の妄想で作られた作品です。

オリジナル設定がありますがご了承ください。

第一話　俺、クビにされて雇われました

# 目次



# 第一話 僕、クビにされて雇われました

とある会社のとある一室で目の腐った青年と小太りの中年の男がいた。

「それで今回私への話とはなんでしょう？」

「ああ、単刀直入に言おう。ヒキタニ君、きみはクビだ」

「は？ 急にクビってどういう事ですか？あと私は名前は比企谷です！」

「おつとすまない。比企谷くん、きみがクビになつた理由はだね・・・、  
きみが仕事でミスをしすぎだ、ときみの上司からの報告があつたからだ」

「は？ 私が仕事でミスですか？」

「ああ、そうだ。ミスの内容についてはこちらも確認済みだ」

八幡は困惑していた。確かに自分は仕事でミスしたことはあるがそれは入社  
したばかりの時の話で、しかもそのミスは会社の経営が傾くようなミスではなかつた  
からだ。

八幡はまだ困惑していたが目上の人の前だつたため、すぐに思考を止め目の前の男に  
向き直つた。

「すいません、どのようなミスが報告されているのか教えてもらつても

## 2 第一話 僕、クビにされて雇われました

よろしいでしようか？」

「いいだろう、きみのミスはだね……」

中年の男は自分のデスクを漁り一枚の紙を取り出して喋り出した。

「商品の発注ミス、資料の紛失、などなど様々な苦情が来ているんだよ……」

「なつ!? 私はそんなミスは入社してから一度もしていません！」

「それは本当かね？ しかし、すでにきみのクビは決まってしまっている。

この報告書が嘘だとしたらきみを助けてあげたいが……」

「いえ、大丈夫です。これ以上話を大きくしても私も会社側もデメリットト  
でしかないのでしょう。今までお世話になりました、後藤さん」

「いやこちらも力になれず申し訳無かつた。あと私の名前は伊藤だ」

「え!? す、すいません伊藤さん！」

「いや、気にするな。それじゃあ、本当に申し訳ないがなんとか頑張ってくれ。比企谷く  
ん

「はい！」

二人は最後に笑顔で別れた。

◊

◊

◊

あの会話の後八幡は行くあてもなくフラフラと散歩していた。

「あ、このあとどうすつかな。そろそろ昼時だし何処かで飯食うか」  
八幡は周りを見渡すと一つの店を見つけた。

「ファミレスでいいか。サイゼじゃないのが残念だが」

そうして八幡はファミレスへ歩いて行き入店した。

店の中に入るとウエイトレスが出て来て元気に挨拶しようとしたが・・・  
「いらっしゃいま・・キヤアアアアア!!ゾンビだー!かたなし君助けてー!」

「は?え?」

「大丈夫ですか、先輩!お、お前先輩に何した!?」

「なんもしてねえよ!この店に入った瞬間に「ゾンビだー!」って呼ばれた  
俺が被害者だろうがよ!」

「せ、先輩がそんな失礼なこと言うわけないだろ!そして先輩の真似するな!  
似てるのがムカつく!」

「後半ほんと関係ねえじやねえか!この店は被害者のお客様を加害者にするのか!?」

メガネをかけた青年と八幡が言い争っているとダルそうな雰囲気を纏った女性が  
やって来た。

「どうした小鳥遊。客がめつちや見てるからやめろ。あと、何で種島は泣いているんだ」

「店長！この男が先輩に何かして先輩を泣かせたんですよ！」

「泣かせてねえよ！俺の目見た瞬間悲鳴上げたけども！」

「なるほど、つまりこいつが種島を泣かせたんだな」

「違うつて言つてるでしょ!?俺、被害者、理解してる!?

「問答無用！」

店長と呼ばれた女性は八幡に鋭い右ストレートを放つが八幡はあっさり受け止める。

「なつ!?!」

「店長の拳を受け止めた!?!」

「何驚いてんの？驚いたの俺だよ？いきなり殴られるとか高校以来だわ」

店長だと思われる女性の拳を受け止める腐った目の男とすごい顔で驚くメガネの青年がいるという何ともカオスな状態が完成した。

その場に先ほど種島と呼ばれていた少女が戻ってくる。

「お客様、先ほどはいきなり逃げ出したりしてすいませんでした。つて何この状況!?!」

◊

◊

◊

◊

数分後固まっていた三人が動き出し状況を確認し始めた。

「つまり種島がお前の目を見てゾンビだと勘違いして小鳥遊がややこしくした、  
というわけだな。小鳥遊お前今日の仕事倍な」

「何ですか！全くこれだから年m 「何か言つたか？」 いいえ何も」  
(平塚先生タイプかよこの人、めんどくせえ)

「お前今失礼なこと考えなかつたか？」

「いいえ、滅相もない（こつわ！怖すぎだろ！何で心読めんだよ）」

「まあいい、今回はこちらの落ち度だからな、料金は免除だ。ゆっくり休んだけ。  
種島！席に案内しろ！」

「はーい！わかりました京子さん！あ、お客様、さつきは本当にすいませんでした！」

種島は席に案内する前に八幡に頭を下げた。

「気にするな、俺のこの目が悪いんだ。お前の反応が正しい」

「で、でも・・・」

ぽぶらがまだ何か言おうとすると八幡はぽぶらの頭を撫でる。

「えつ」

「もういいって言つてるだろ？本人がいいって言つてるんだ素直に受け取れ。

それにお前みたいなちつちやい奴がずっと頭下げるに俺が社会的に殺されちゃうからな」

「は、はい。ありがとうございます……つてちつちやくないよ！私こう見えて高校生なんですから！」

「嘘だろ……大目に見ても中1くらいかと思つたぞ」

「バカにしないでください！もういいです！席に案内するのでついてきてください！」

そして八幡は席に案内され座る。

「注文するものを決めたらボタンを押してください」

そう言つてぽぶらは店の奥に戻っていく。

「あいつ由比ヶ浜みたいでおもしれえな。由比ヶ浜か……それに雪ノ下……あいつら元気かな……なんてなこんなの俺の柄じゃない」

八幡は高校の時の部活仲間を思い出したがすぐにやめ、メニュー表を見る。

「おっ、ミラノ風ドリアあるのか。よし注文するか」

八幡はボタンを押す。するとやつてきたのは先ほど八幡と

言い争っていたメガネの青年だつた。

「あ、先ほどはすみませんでした。気が動転していて……」

「ああ、さつきも種島つて奴に言つたがあれが普通の反応だ。そんなに気に病むな。

「それより注文いいか？」

「は、はい。それではご注文をどうぞ」

「おう、ミラノ風ドリアとアイスコーヒーで頼む」

「はい、ミラノ風ドリアとアイスコーヒーですね。あと、あの・・・」

「ん? どうした?」

「いえ、会社員の方達は今日も出勤だと思つて、それに昼休みならもう終わつてると思い  
ますし」

「ああ、俺今日クビにされたからな」

「えっ! す、すみません、失礼なこと聞いちやつて」

「いや気にするな。俺の自業自得だから」

「自業自得って・・・いいから早く注文伝えてこい」・・はい」

八幡は無理やり話を終わらせ小鳥遊を店の奥に追いやる。



数分後、八幡の元に小鳥遊が注文したものを持ってきた。

「ご注文された、ミラノ風ドリアとアイスコーヒーです」

「ありがとな、つてどうした」

八幡は注文の品を届けたが下がろうとしない小鳥遊を不思議に思つた。

「いえ、先ほどの話良ければ詳しく教えてもらいたくて」

「知り合いでもないお前に話すことなんか「思つたんです」・・・何がだ」

「いえ、こちらに非があったのにこっちのこと気遣つてくれたりだとか、

そんな氣を使える人が自業自得でクビになるわけないと思いまして」

「それはどうだろうな、仕事のミスのし過ぎかもしないし、セクハラでクビになつたのかもしないぞ。というかさつきも言つた通り知り合いでも

ない奴に話すことなんてない」

「それなら、僕は小鳥遊宗太といいます。16歳で、ここには最近働き始めました。

…

これで

知り合いですよね」

「意地でも引かないつもりか・・・というか何で知りたい」

「純粹な興味と、良ければここで一緒に働いて欲しいからです」

「は? 何で?」

「今ちょっと人手が足りないらしくて、人員募集してると

ツツコミが足りないんです」

「はあ、なんかもう一気に肩の力抜けたわ。わかつた話してやる。

その前に僕の名前は比企谷八幡だ。それじゃあ、話すぞ」

「はい」

八幡はクビになつた理由と自分の憶測を話した。



八幡が話終ると小鳥遊はちよつとだけキレていた。

「自分が仕事上手くいかないからつて自分のミスを人に押し付けるとかおかしいですよ！」

「落ち着け、ミスを押し付けられた理由は恐らくこれだけじゃない」「え？」

「俺に押し付けた奴らは一回だけやつちやいけないことをやつた、

それを俺が上司に報告したからだと思う。俺はわかつてた、上司に報告したらやり返されるだろうってわかつてたんだ。でも俺は報告したんだよ。これで話は終わりだ。言つただろ？ 自業自得だつて」

「やっぱりいい人ですね、あなたは。もう一度改めてお願ひします。

僕らと一緒にここで働いてくれませんか？」

「そうか、こつちの負けだ。あの店長が許可したら働いてやる。こつちにはメリットしかないからな」

「ありがとうございます。それじゃあ店長に聞いてきます」

小鳥遊は早足で戻つていき、八幡は注文したもの食べ始めた。  
「冷えてるし……でもうまいな」



30分ほど経つた頃小鳥遊とぽぶらが八幡の席に向かつてきた。

「んで? どうだつた」

「はい、正式に雇つてくれるそうです」

「そうか、それじゃあこれからよろしく頼むぞ。小鳥遊、種島」

「はい、よろしくお願ひします!」

「あつ、ちゃんと私挨拶してなかつた! 種島ぽぶらです!」

「これからよろしくお願ひします!」

「ああ、比企谷八幡だ。改めてよろしくな種島」

こうして八幡はワグナリアの一員になつた。